の舟來りあつまりしが、このところも今津とその浦めぐりつらなりて近きゆへ、韓人の宿する亭を置れしにより、韓亭といへるにや、亦能古島と唐泊は、そのあいだ二里餘の海をへだてたれども、むかひに相對してちかく見ゆ、いにしへ人、から泊のこの浦波とつゞけてよめる歌より、境趣に叶へり、東の山側に大岩多し、このところを牛の谷といふ、この山の上に胄石といふ丸き岩あり、

〔萬葉集十五〕到筑前國志麻郡之韓亭、船泊經三日、於時夜月之光、皎皎流照、奄對此華、旅情悽噎、各陳心緒、聊以裁歌六首、〇四首略

可良等麻里能許乃宇良奈美多々、奴日者安禮杼母伊敝爾古非奴日者奈之、
可是布氣婆於吉都思良奈美可之故美等能許能等麻里爾安麻多欲曾奴流、

名稱

港

港ハ、湊トモ書シ、ミナトヽ訓ズ、原ト水門ノ義ニシテ、河水ノ海ニ入ル處ヲ謂フナリ、後世ハ、專ラ船舶ノ會集止泊スル地ヲ稱シ、以テ古ノ津ト混ズルニ至レリ、蓋シ河水ノ海ニ入ル處ハ、船舶ノ會集止泊スルニ便ナレバナルベシ、

〔倭類聚名抄一涯岸〕湊　說文云、湊水上人所會也、音奏、和名奈止三

〔箋注倭名類聚抄一七水〕按、瀰儺度、見武烈紀、齊明紀御歌、蓋水之門之義、〇略中所引水部文、按、美奈度、水之門也、謂河水入海之處、居處部水門條詳辨之、湊謂非因河水入海、而海舶止泊之處、則宜訓都、都爲物止住之義、附訓都久、積訓都牟、集訓都度布、皆是也、雖古人用津爲都、然津水度之處、宜訓和多利、非都也、